

統一テーマ「ロマンス諸語における助動詞」

山村ひろみ（とりまとめ）

§ 1 はじめに

日本ロマンス語学会第 51 回大会の統一テーマは「ロマンス諸語における助動詞」であった。この枠内で儀保ルシーラ悦子、鳥越慎太郎、川上茂信、松澤水戸、坂口友弥、チェスバ・マリアンナ（敬称略、以下同様）の 6 名が発表（持ち時間各 20 分）を行なった。儀保、鳥越はポルトガル語、川上はスペイン語、松澤はフランス語、坂口はロマンス語スルシルヴァン方言、チェスバはイタリア語に関する助動詞の問題を論じた。休憩を挟み、総合討議が本稿筆者の司会のもとで行なわれた。

§ 2 総合討議と質疑応答

以下に総合討議のもととなる研究発表の要旨と、それを巡って行なわれた討議の概略を記す。

（1）儀保ルシーラ悦子「ブラジル・ポルトガル語のアスペクト・テンス対系－日本人研究者及び学習者のための解説－」

本発表は、ブラジル・ポルトガル語の文法書ではテンス、法のように動詞の文法的範疇としては十分に記述されていないそのアスペクトを、Travaglia (2006)の提唱する *Perfectivo, Durativo, Cursivo, Resultativo, Iterativo, Habitual* という概念、また、工藤(1995)が提示した現代日本語の「完成相・継続相」、「過去・非過去」という基本的なアスペクト・テンス体系、および、その拡大した体系である「完成性・継続性・パーフェクト性・反復性」、「過去・非過去」と比較対照させながら論じたものである。

総合討議では、特に、ブラジル・ポルトガル語の *ter (presente) + participio* が *aspecto iterativo* を表すという発表者の指摘に対して、議論が交わされた。

（2）鳥越慎太郎「第二言語ポルトガル語学習者によるモダリティ形態素習得」

本発表は、ポルトガル語学習者の法助動詞(*poder, dever*)、未来・過去未来、接続法の習得状況を学習者自由作文コーパスの *Corpora do PLE*、*Corpus de PEAPL2* を利用して量的に検討したものである。その結果、CEFR の初級レベルの学習者でも接続法をはじめとする形態素によるモダリテ

イ表現が使用できていること、レベルが上がるにつれて、各項目の使用頻度がバランスよく増加することが示された。

総合討議では、本研究のように、学習者の産出形式だけを対象とする手法は学習者の習得度を正しく測ることができるか、ということをめぐり議論が交わされた。

(3) 川上茂信「義務と反実性：スペイン語 tener que と deber を巡って」

本発表は、ニュアンスの差はあるものの、いずれも「義務」を表すことのできるスペイン語の tener que と deber の時制と反実性表示の関係を論じたものである。一般に、tener que の単純過去は不定詞が示す事態が実現したことを、一方、deber の単純過去は不定詞が示す事態が実現すべきだったのに実現しなかったという反実解釈になると述べられているが、実際には、tener que の単純過去が反実解釈、また、deber の単純過去が実現解釈になることもあるということ、発表者は CREA やインターネットの検索を通し、実証的に示した。また、その結果を Rojo(1990)が提示したスペイン語動詞の時制体系と照合し、反実解釈が可能な場合は、Rojo(1990)の relación temporal primaria が「前時」であることを明らかにした。

総合討議では、当該形式の用法と人称の関係についての質問、また、スペイン語における deber の用法と他のロマンス語における用法の違いについての指摘があった。

(4) 松澤水戸「フランス語における複合過去と半過去の使い分け—語彙アスペクトを用いた分類—」

本発表は、フランス語学習者の複合過去と半過去の使い分けの状況を、当該時制によって表される動詞の語彙アスペクトとの関係から論じたものである。発表者はフランス語専攻学部生 88 名を対象とし、不定法で提示した 81 の動詞について、複合過去と半過去のどちらの時制が適しているかを問うアンケートを実施した。その結果、正解率の高いものは、Labeau(2005)の語彙アスペクト分類のうちの Telic と複合過去、Atelic と半過去、Stative と半過去であった。このことから、発表者は、Labeau(2005)の提示した語彙アスペクト分類が複合過去と半過去の使い分けを指導する際に役立つ可能性を指摘した。

総合討議では、アンケート結果の統計処理上の問題、アンケート作成上の問題などが議論された。

(5) 坂口友弥「ロマンシュ語スルシルヴァン方言の助動詞の選択性」

本発表は、ロマンシュ語スルシルヴァン方言の自動詞の迂言法過去時制における助動詞 haver(have)と esser(be)の選択性を、Perlmutter (1978)の非対格仮説に基づき提唱された Sorace (2000)、

Leggendre (2007)の助動詞の勾配という観点から、フランス語およびイタリア語との比較対照を通し、論じたものである。その結果、ロマンシュ語スルシルヴァン方言の助動詞選択の cut off point はフランス語およびイタリア語のそれよりも低いこと、同言語における助動詞の分布はイタリア語の助動詞の分布と多くの部分で共通するが、いくつかの動詞の助動詞選択はイタリア語とは異なること、predicate の影響による助動詞の交替は resunar(resound)以外では見られなかったことが明らかにされた。

総合討議では、同一の動詞に対して、ロマンシュ語スルシルヴァン方言が選択する助動詞とそれ以外のロマンス諸語が選択する助動詞との比較対照、また、同じ言語内の同一の動詞に対する助動詞選択に関与する諸要因などについて、活発な意見交換があった。

(6) チェスパ・マリアナ「イタリア語における過去を表す時制について－近過去・遠過去・現在形－」

本発表は、イタリア語の過去に言及する時制、近過去、遠過去、現在形の相関関係を論じたもので、遠過去と近過去の置き換えは必ずしも可能ではないこと、近過去には遠過去のように現在と関係のない事象を表すアオリスト的機能と現在形のように現在と関係のある事象を表す完了的機能の二重性があること、過去における事象に言及する近過去のうち完了的機能を表すものは現在形と置き換えが可能であることを明らかにした。

総合討議では、関係節中に出現した遠過去と近過去の解釈の違い、近過去の完了的機能とアオリスト的機能の解釈について、議論が交わされた。

§ 3 まとめ

今回の統一テーマは助動詞であったが、6つの発表のうち儀保、松澤、坂口、チェスパは当該言語のテンス・アスペクト形式という観点から、また、鳥越、川上は当該言語のモダリティ形式という観点から助動詞を論じたものであった。確かに、ロマンス諸語における助動詞を語る際には、まず、複合過去形を構成する avoir(avere, haber, ter 等)や être(essere 等)が思い浮かぶことから、発表のテーマとして当該言語のテンス・アスペクトに関するものが多かったことは理解できる。また、同様に、poder (pouvoir, potere 等)、dever (devoir, dovere 等)といったモダリティに関わる動詞が取り上げられたのも当然であろう。しかしながら、例えば、坂口がロマンシュ語スルシルヴァン方言の複合過去形のことを「迂言法過去時制」と呼んでいたように、実は、ロマンス諸語において何を助動詞と呼ぶのかの基準は明らかになっていない。そのような観点からすれば、総合討議の場で、ロマンス諸語における「助動詞」の位置づけについての議論があってもよかつたのではないかと思われる。